



ニューヨークの新世代ポークァリスト

MI
TSU
KO

デビュー!!

クラシックも勉強したけど、結局納得のいく音楽がジャズだった

去る11月21日に本誌〈ゴールドディスク〉に選定された「ブルー・カナリー」でデビューを果たした美人女性ボーカリスト、MITSUKOに話題が集まっている。アメリカでミュージカル、オペラ、ジャズを学び、本場ニューヨークで鍛え上げられた豊かな声量と透明感溢れる清冽なボイスは、我が国のジャズ・ボーカル界に新たな息吹を注ぎ込もうとしている。 ●馬場啓一

ニューヨークで活躍中の邦人女性歌手MITSUKOのデビュー作品『ブルー・カナリー』は、そのユニークな歌唱と、深く共感を呼ぶ解釈で、最近のボーカル・アルバムでは出色の出来となった。彼女の肉声を聞こう。

「本場ニューヨークで日本人がジャズを歌うことに、実は最初不安がありました。でも、納得のいく音楽とはなにかを自問し、クラシックやミュージカルも勉強したけど、結局ジャズがそれならためらうことはない、と思い直し、以来自分を信じ歌い続けています」。

きっぱりと言い切る。ジャズはマンハッタン音楽院で学び、同期にはジェーン・モンハイトがいた。でも彼女はそもそもクラシック専攻で、オペラ「魔笛」とか、さらにはミュージカル「王様と私」などの公演に参加したこともあるのだ。音域はソプラノ。

だが今作でグノーの〈アベ・マリア〉を取り上げたのには、別の深い理由が。「元々はラテン語の詩だったので、自分で英語のオリジナル詩を書きました。2年前にバイク事故で亡くなった兄に捧げるためです。これを歌おうと決めた夜、兄の夢を見たのです。逝った人を痛む気持ち、人々と共有したいと願う心の現われですね。1曲目〈枯葉〉も兄の葬儀に歌った曲だったんですよ」。

キャンボール・アダレイとマイルスの共演で知られる例の『サムシン・エルス』の超有名バージョンが、解釈のベースになっていることに、耳の良い人なら気づくだろう。

「たくさんのジャズ・アルバムを聴きましたし、ステージにも接しましたが、一番はやはりエラ・フィッツジェラルドです。お気に入りにはソングブック・シリーズと「イン・ベルリン」。あと、サラもビリーも、ニーナ・シモンもシャーリー・ホーンも好き」。

黒人の大物ばかりである。白人女性歌手の名前が出ないのに注目したい。「エラの、素材を生かしたシンプルな解釈に惹かれます。スカットやアドリブも好き」。

そういう彼女のデビュー作のバックアップは、ニューヨーク在住の邦人ジャズメンのグループ、J・ヨーカーズの面々と新鋭ドミニク・ファリナッチである。



「ブルー・カナリー」/MITSUKO・ウイズ・J・ヨーカーズ
(日本クラウン:Floreria CRCF-10001)

「バックアップというより、彼らあっての私の演奏というか歌ですね。アレンジから始めて実際のプレイそして録音と、ひとつひとつの作業を一緒に行い、苦楽を共にした仲間です。彼ら自身のデビュー・アルバムも近日中にリリースされる予定なんですよ」。

それとドミニク・ファリナッチ。弱冠20歳である。たまたま本インタビューの夜、東京で彼のライブを聴くことが出来た。「若いでしょう、彼って。演奏だけ聴いていたら、まさかこんな童顔の青年が吹いているなんて想像できませんよね。なのに凄く大人のサウンドと解釈で、特にクネバー・レット・ミー・ゴーは素晴らしかったですね」。

彼女自身も来年3月に凱旋公演の予定、大いに楽しみである。セールスも好調と聞く。

ミュージカル、オペラでのMITSUKOの活躍ぶりをみる



①



②



③



④
①ミュージカル「王様と私」にタップタイム役で出演 ②「王様と私」に出演した子供達と家族裏でのオフショット ③1998年10月24日、NYのハンター・カレッジにて世界初演となったミュージカル「かぐや姫」では見事かぐや姫役を勝ち取った ④同ミュージカルのパフレット